

春季総合研究会のご案内

二〇〇六年度春季総合研究会を左記の通り開催いたします。

記

日時 六月二十四日(土) 十三時三〇分～十七時〇〇分
場所 東京大学経済学部 大学院経済学研究科棟 地下第一教室
論題 『共同体の基礎理論』を読み直す 共同性と公共性の意味をめぐって

問題提起

小野塚知二 (東京大学)

報告一 「理論・現状分野から」

黒瀧 秀久 (東京農業大学)

報告二 「現段階における農業共同体の性格と機能」

荒井 聡 (岐阜大学)

報告三 「近世村落共同体論について」

渡辺 尚志 (一橋大学・非会員)

報告四 「大塚久雄と近代中国農村研究」

三品 英憲 (埼玉大学・駿河台大学・

中央大学兼任講師)

報告五 「共同体の「ゲルマン的形態」再考 静態モデルから動態モデルへ」

飯田 恭 (慶應義塾大学)

討論 司会

小野塚知二 (東京大学)

沼尻 晃伸 (埼玉大学)

趣旨 本学会は過去一〇年ほど、主として新自由主義やグローバリゼーションに関わるテーマを中心として

春・秋の研究会・大会の共通論題を組織してきた。今期の新たな研究委員会は今後三カ年の統一的なテーマを模索する中で、公共性・共同性・貧困・新たな格差社会の形成などのキーワードが、そうした過去の大会テーマに接続する課題に密接に関わるものとの認識を共有しつつある。

そこで、今年度の春季総合研究会では共同性・公共性に関わる今日的論点を明確にする意図をもって、改めて『共同体の基礎理論』を読み直すというテーマを設定し、本学会の各分野の若手・中堅委員に報告をお願いした。

同書は名著であり、いまや古典の地位を獲得していることはいままでもないが、他方では批判もある。同書における共同体への関心は前近代から近代への移行の本質を探るための一つの基礎であったことは疑いのないところではあるが、はたして今後の共同性・公共性を模索する手掛かりとして読まれたのか否か、「ミニタリアニズムとの緊張関係をいかに理解するか」という問題が残されているところについては、

また、同書は歴史における理論の役割を考える上でも多くの示唆を与えるとともに、その内容については美証的な批判も存在している。

このような同書の意義を踏まえつつ、報告者には以下の四つの問いに答える形で共同性と公共性の今日的意味を明らかにするテーマに接近していただくことにした。

- (一) 同書をかいて、どのように読み、何を学び取ったか？
- (二) 現在までの自らの研究や関心に照らして、同書はどのような問題を孕んでいるか？
- (三) 現在、どのように読み直す価値があるのか？ことに近現代あるいは今後の公共性を考える際に同書はいかなる意味をもちうるか？
- (四) さてに(一)可能ならば(二)、将来の公共性、協同性、共同性を構想する際に重要と考えられる論点は何か(同書の内容から離れても構わない)？

会員諸氏の積極的な参加を期待したい。

会員各位

二〇〇六年四月二十八日

〒一三三 八六九一

文京区本郷郵便局私書箱五六号

政治経済学・経済史学会